

タイトル

「私がセックスしない理由(わけ)」

ジャンル:ラブコメディ

上演時間:約2時間

登場人物

宮本環(34)幼なじみと5ヶ月前に結婚した専業主婦。

宮本三太(38)環の夫。

蘭子(38)三太の幼なじみ。オカマバー「秘密の花園」のママ。

モモ子(28)「秘密の花園」の従業員。

バラ子(33)「秘密の花園」の従業員。三太の大ファン。

久保田幸子(42)宮本家の隣に住む女性。韓流スターの大ファン。

平山貴昭(35)幸子の同棲相手。売れない役者。

小池ゆかり(33)環の元同僚。

宮本裕子(26)三太の義理の妹。

男:5名

女:4名

計9名。

本編

第一幕 第一場

賑やかで楽しげな音楽が鳴り響く場内。音楽が徐々にF・O。

暗転の中で、小池ゆかり(33)の、驚きまくったような大声が響き渡る。

ゆかり(声)「えっ~~~~?!」

明かりC・I。

宮本家リビング。

全体的に木のぬくもりを感じさせる優しい部屋。

中央にダイニングテーブル。下手前にソファとテーブル。

下手奥に玄関や風呂場へと繋がる入口。

奥には隣室に繋がる引き戸。

上手前にはチェスト。上手奥にはキッチンへと繋がる入り口。

中央のテーブルに宮本環(34)とゆかりが座っている。

ゆかり「あんたそれマジで言ってんの？」

環「…こんなこと、嘘や冗談じゃ言えるわけじゃないじゃない」

ゆかり「ちょっと待ってよ。環と宮本さん、結婚してどのくらいだっけ？」

環、指を折って月日を数える。

環「5ヶ月」

ゆかり「5ヶ月？ 5ヶ月間、一度もセックスしてないの?!」

環、居心地悪そうにならずく。呆れるゆかり。

ゆかり「(キッパリと)ありえない。断じてありえない! そんなの世間が許してもあたしが許さない!」

環「だって本当なんだもん。5ヶ月どころか、結婚前にだって一度もしてないし、キスだってまだだし…」

ゆかり「(ギョツとして)…マジ？」

うなずく環にゆかりが大きなため息を吐く。

ゆかり「まあさあ…あんたたちは普通の恋人同士だったってわけじゃないから、普通の手続きを踏んでないっていうのは分かるけどね」

環「普通の手続きって何よ」

ゆかり「だからさあ、普通の恋人同士だったら必ず踏むステップってやつよ」

環「ステップ？」

ゆかり「普通はね、お互い相手を好きになって、お付き合いはじめて、キスしてセックスして財産あるなし確かめて、それからでしょ? 結婚するの」

環「ああ…そういう事」

ゆかり「まあ最初にセックスが来る場合もあるし、見合っていうパターンもあるから人それぞれだけど」

環「セックスから始まる結婚？」

ゆかり「そりゃあるでしょ。ナンパしてエッチして、まあ私たち相性ぴったり! じゃあ結婚しちゃいましょうってね」

環「…そういう事ね」

ゆかり「でもさあ、いくらなんでも結婚して5ヶ月、何もないって言うのはねえ…」

環「最初はね、お兄ちゃんに照れてるんだって思ってたのよ」

ゆかり「幼なじみだもんね。お隣さん」

環、またうなずく。

環「あたしの事、生まれた時から知ってるわけじゃない」

ゆかり「まあ、照れるよねえ、普通」

環「でしょ? でもねえ、ここまで何もしないっていうのは、やっぱりちょっとおかしいなあって思ったんだよねえ」

ゆかり「で、あたしに相談ってわけなのね」

またまたうなずく環。

ゆかり「しかし、おかしいと思うのに5ヶ月掛かるあんたもあんただよねえ」

環「おかしいなあっていうのは、ずっと思ってたの。ただ…結婚のキッカケがキッカケだったし、お兄ちゃんにも気持ちの整理が必要だよなあなんて思ってる間に、いつの間にか5ヶ月過ぎちゃって…」

ゆかり「あんたの元不倫相手、子供生まれたよ、先月」

環「…そう」

ゆかり「社内メールで子供の写真、みんなに送ってくるんだって。旦那が言ってた」

環「そうなんだ…」

ゆかり「あたしはさあ、あんたと部長の事知ってるから、なんだかすっごく頭にきちゃってさ。浮かれてんな！ って言いたくなっちゃった」

環「あの人、本当に子供欲しかったみたいだから…しょうがないよ」

ゆかり「でもねえ、奥さんに子供ができないから不倫っていうのもおかしいけど、子供ができた途端にハイさようならっていうのはもっとムカつくのよ。いったい女をなんだと思ってんだって、言ってるやらないね。その点宮本さんは偉い！ 全てを知ったうえで、それでも結婚しようって言ってくれたわけでしょ？」

いつの間にかうつむいている環に気付くゆかり。

ゆかり「あ…ごめん…。そうだよ、もう部長のことなんて思い出したくないよね。ごめんごめん、ついムカついちゃって…」

環、ゆかりに小さく笑いかける。

環「…大丈夫。もう終わった事だもん」

ゆかり「本当に？」

環「(うなずいて)あたしはお兄ちゃんと結婚したんだし、昔の事はもう忘れた！」

ゆかり、環の言葉に大きくなずく。

ゆかり「よし！ こうなったら部長に対抗して子供作ろう。あつちはたぶん1人で打ち止めだから、こっちは少なくとも3人は作ろう。それで、旦那に頼んで社内メールで配信してもらおうよ！ 環はキレイだから、きっと可愛い子供ができると思うよお」

環「だからあ」

ゆかり「何？ あんた子供嫌いだっけ？」

環「好きだけどね」

ゆかり「ああ、宮本さんの顔？ 大丈夫大丈夫。今は産み分けっていうのが出来るんだって。男の子は母親似だって言うから、可愛い男の子作って部長に写真送ろうよ」

環「そうじゃなくてさ」

ゆかり「何よ。何か問題でも？」

大きな問題に気付くゆかり。

ゆかり「あ！ 子供も何も、セックス自体がないんだって」

環「(呆れて)さっきからそれを相談してるんじゃないの」

ゆかり「(へへッと笑い)ごめんごめん、そうだった」

腕組みをして考え込むゆかり。

ゆかり「う～ん…いったいどういう事なんだろう。女のあたしから見ても、環はキレイだしスタイル

もいし、性格も悪くない。となると…宮本さんに女が？」

チラッと環を見るゆかり。ブンブンと首を横に振る環。

環「それはないと思う。いつも7時には帰ってくるもん」

ゆかり「郵便局って残業ないの？」

環「そりゃああるよ」

ゆかり「民営化の後処理とか？」

環「違います」

ゆかり「ふ～ん…となると…」

ゆかり、突然椅子から飛び上がるように立ち上がる。

ゆかり「宮本さんはホモよ！ 間違いない！」

環「え～？！」

両手を組んで、探偵のように推理をし始めるゆかり。

ゆかり「そうか、そういう事か。つまり、あんたとの結婚は偽装だったのよ！」

環「(苦笑ぎみに)ちょっと待ってよ。ありえないって」

ゆかり「どうして？ だいたいどんな理由があろうと、こんなキレイな子と結婚して、5ヶ月間何も
ないっていうのは、健康な男子ならそれこそありえない話でしょ」

環「(不安そうに)病気なのかな？ EDとか」

ゆかり「ホモだね」

環「(ふくれて)…面白がってるでしょ」

ゆかり「違う違う。宮本さんって、ホモ臭するもん」

環「ホモ臭？」

ゆかり「そう。ホモ臭いって事」

環「お兄ちゃんが？」

ゆかり「(うなずく)ああいう顔と体型の人って、元々ホモが惚れやすいのよ。ほら、デブ専って聞
いた事あるでしょ？」

環「それはあるけど…」

ゆかり「悪いけど、宮本さんって、あんまり女にモテるタイプじゃないじゃない？ たぶん、暗い青
春を過ぎてきたと思うのよ」

環「ちょっとお、勝手に決めないでよ」

ゆかり「ある日1人のホモがやってきて、宮本さんに囁いたのね。『三太さん、あなたってとっても
セクシー。あたしを抱いてくれない？』」

環「何それ」

ゆかり「その時、暗くジメツ～とした青春を送ってきた宮本さんに、一筋の光が差したのよ。これ
だ！ 俺の進むべき道はここにしかないって！」

呆れかえる環。

環「あのねえ、人の旦那の事、よくそこまで言えるわね」

ゆかり「思い出したんだって。ほら前に、環に連れて行ってもらった事あったじゃない。新宿2丁目
のゲイバー」

環「『秘密の花園』でしょ。蘭子さんのとこ」

ゆかり「そうそう、『秘密の花園』。あの宮本さんの同級生なんですよ？」

環「そうだけど」

ゆかり「宮本さん、あそこの常連じゃない。う～ん…怪しい」

環「蘭子さんとお兄ちゃんが？ それこそありえないよ」

ゆかり「どうしてよ」

環「あたしは蘭子さんの事もよく知ってるもん。あの2人は小学校からの同級生で、仲のいい友達。それ以上でもそれ以下でもないの」

腑に落ちていないゆかり。

ゆかり「じゃあさ、どうした宮本さんはあんたとセックスしないわけ？」

環「それがわからないから相談してるんですよ」

ゆかり「だからさっきからいって…」

突然何かを思いついた様子のゆかり。

ゆかり「いい事思いついた。今日宮本さんが帰ってきたら、環の方から誘ってみるの。セックスしない？ って」

環「え～！」

ゆかり「え～！ じゃない！ 他にどうやって確かめるのよ、ホモかどうか」

環「だからホモじゃないって。何か違う理由があるのよ」

ゆかり「どっちみちこのままじゃ埒が明かないわよ。違う？」

環「でもお…」

ゆかり「環だってこの状態を何とかしたいって思ってるんですよ？ だからこそその相談なんじゃないの？」

環「まあそうなんだけど…」

玄関が開く音がして、奥から宮本裕子(26)の音がする。

裕子(声)「環さ～ん？ 入りますよお」

突然の訪問者に驚き、玄関への入口を振り返る環。裕子が紙袋を持って入ってくる。

裕子(声)「鍵開いてましたよ」

ゆかり「あ！ あたしだ」

ゆかりにペコッと頭を下げる裕子。

環、ゆかりに裕子を紹介する。

環「裕子ちゃん。お兄ちゃんの妹なの」

裕子、ニコッと笑ってゆかりに挨拶する。

裕子「義理ですけど」

環「お兄ちゃんのお母さんが再婚した人の子供」

裕子「紛らわしいですよね」

ゆかり「そっか。道理で宮本さんに似てないなあって思った。キレイな人だね」

環「ちょっと、ゆかり」

ゆかり「(へへッと笑って)お兄さんには内緒でお願いします」

裕子「(苦笑)はい」

環「前に勤めてた会社の同僚なの。小池ゆかりさん」

ゆかり「はじめまして」

環「裕子ちゃん、またお惣菜？」

持っていた紙袋をテーブルに置く裕子。

裕子「(うなずきながら)変わり映えしなくてごめんねって、お義母さんが」

環「いつもありがとねえ。おばちゃんに…じゃなくてお義母さんにすいませんって言っといてね」

裕子「はい」

ゆかり「そんなにしょっちゅうおかずくれるの？」

環「週1くらい。助かっちゃう」

ゆかり「そっかあ、環の料理はユニークだから、お母さんも宮本さんの健康に気い使ってるんだね」

裕子「ユニーク？」

ゆかり「裕子さん、環の料理食べた事ある？」

裕子「ないですけど」

ゆかり「それはラッキーだわ」

裕子「え？」

ゆかり「努力はしてるみたいなんだけど、これがむちゃくちゃ不味いのよ」

環「あんた本当口悪いよね」

ゆかり「ちゃんとレシピ通りに作ってるんだよね」

環「(懨然と)作ってます」

ゆかり「じゃあ何であんなデロ〜ンとした味になるわけ？」

環「知らないよ」

ゆかり「宮本さん、環の料理毎日食べてるんでしょ？ よく我慢してるよね」

環「どういう意味よ」

ゆかり「あんたこのままだと離婚されるよ」

環「大きなお世話です」

ゆかり「(何かに気づいたように)…わざとだったりして」

環「え？」

ゆかり「偽装結婚の話よ。いつ別れてもおかしくない状況を作ってるんじゃないの？」

裕子「偽装結婚？」

ゆかり「(裕子に)今ね、宮本さんのホモ疑惑が浮上してるのよ」

環「ゆかり！」

裕子「お兄さんがホモ?!」

ゆかり「状況的にそれ以外考えられないのよ」

環「ちよつとお！」

裕子「どうして突然、そんな疑惑が？」

ゆかり「聞きたい？」

瞳をキラキラさせ、興味津々状態の裕子。

裕子「はい！」

ゆかり「環と宮本さん、今まで一度もセックスした事ないんだって」

環「ああ！もう！」

裕子「マジですか?!」

ゆかり「(うなづく)結婚して5ヶ月も経つのに、セックスはおろか、キスもしてないなんて絶対変よね。そう思わない？」

裕子「(何度もうなずいて)思います。それは相当変ですね」

ゆかり「それに、ゲイバーの常連でもあるの」

裕子「(びっくりして)お兄さんがですか?!」

環「(焦って)誤解しないでね。お兄ちゃんと同級生がやってる店なの。ただの友達。飲みに行ってるだけなのよ」

裕子「でも、ゲイバーなんですよ？」

環「…まあ…そうなんだけど…」

何度も満足げにうなづくゆかり。

ゆかり「証拠は揃ったって感じね」

裕子「(うなずいて)そうですね」

環「ちょっと2人とも！」

ゆかり「こうなったらもう、事実を確かめるしかないって思わない？」

裕子「思います」

ゆかり「でしょ？ だからあたし言ったのよ、今日宮本さんが帰ってきたら、即座にセックスをせまってみろって。その反応でホモかどうか分かるってもんでしょお」

裕子「(しみじみと)お兄さんがホモねえ…道理で女つけないなあって思った」

環「もう！ 裕子ちゃんまで決め付けしないでよ」

ゆかり「いい？ 環、宮本さんが帰ってきたら、すぐに行動を開始するのよ。わかった？」

環「え～…」

玄関が開く音がして、宮本三太(38)の音がする。

三太(声)「ただいまあ」

ゆかり「ホモ帰宅」

環「ゆかり！」

三太「無用心だなあ。玄関鍵開いてたぞ」

そう言いつつ、三太がリビングに入ってくる。ゆかりと裕子を見つける三太。

三太「着てたんだ」

ゆかり「お邪魔してまあす」

ゆかりの意味ありげな笑いに少し躊躇しながらも、愛想良く答える三太。

三太「いらっしやい。(環に)着替えてくるな」

環「…うん」

テーブルの上の紙袋を見つける三太。

三太「(裕子に)またお袋？」

裕子「うん…まあ…」

ジャケットを脱ぎながら、奥の部屋へ入っていく三太。

三太(声)「環もちゃんと作ってくれてるし、そんなにしょっちゅういらないって、お袋に言っといて」

裕子「(奥の部屋へ)は～い。伝えておきまあす」

突然奥の部屋から三太の叫び声がこだまする。

その声に驚く3人。

三太、奥の部屋から血相を変えて飛び出してくる。

三太「環！」

環「何？ どうかした？」

驚き顔の3人を見て、ハッとする三太。

三太「いや…あの…。(環にお伺いを立てるように)俺の机、片付けた？」

環「(戸惑いながら)ゴミ溜めみたいだったから整理はしたけど」

三太「ああ、そう…」

環「まずかった？」

三太「イヤ、全然まずくないんだけどもね」

環「じゃあ…何？」

三太「あの…」

三太、両手で四角を作る。

三太「これ位の大きさの箱なかった？」

環「箱はたくさんあったけど」

三太「(恐る恐る)中身、見た？」

環「ううん」

三太「(ホッとして)そのたくさんの箱は、今どこに？」

環「いろいろ」

三太「いろいろ？」

環「大きさに合わせて、そこのチェストとか押入れとかに整理した」

ゆかり「何か無くなってモノがあるんですか？」

環「そうなの？ ごめん。仕事に必要な物？」

三太「イヤ、大丈夫」

環「何で？ 探すよ。何無くなったの？」

三太「…無くなってないから」

環「えっ？」

三太「無くなってないから大丈夫」

環「だって」

三太「ごめん、本当に何でもない」

がっくりと肩を落とし、奥の部屋に戻っていく三太。

その後姿をジッと見つめるゆかり。

ゆかり「怪しい」

環「えっ？」

ゆかり「怪しすぎる」

裕子「ですね」

ゆかり「あかし、宮本さんが無くしたモノ分かった」

裕子「何ですか？」

ゆかり「ホモ雑誌の切抜きよ」

環「え～！」

ゆかり「声が大きい！」

環「だって」

ゆかり「あの焦り方、探すって言った時の慌て方、そして、生きがいをなくしたような後姿。間違いないね」

裕子「環さん、これはもう本当に確かめるしかないですよ」

ゆかり「いい、環。あたしたちはもう行くからね」

環「(ちょっと焦って)帰っちゃうの？」

ゆかり「当たり前じゃないの。いてどうするのよ」

環「だってえ・・・」

ゆかり「ちゃんと結果報告しなさいよ」

環「本当にしなきゃダメ？」

ゆかり「あんたねえ、ホモと結婚してたって将来ないわよ」

環「だから違うって言ってるじゃないの」

裕子「確かめた方がいいですって」

ジャージ上下に着替えた三太が、奥の部屋から出てくる。

三太「どうしたの？」

突然話しかけられて驚く3人。

裕子「何でもない何でもない」

環「そうそう。何でもないの」

三太「ふ～ん」

ゆかり「え～と、あたしはそろそろ帰ろうかなあ」

環「もう行くの？ まだいいじゃない」

ゆかりの腕をギュッと掴む環。

環「(小声で)お願い。まだ心の準備が」

ゆかり「(小声で)往生際が悪い！ さっさとする！」

環につかまれた腕を、勢よく振り放すゆかり。

三太「ゆっくりしていけばいいのに」

ゆかり「(三太に)イヤイヤイヤイヤ、なんていうかお邪魔だろうし。ねえ・・・」

裕子に視線を送るゆかり。承知したとばかりにうなづく裕子。

裕子「(ちょっと棒読みで)あ！ いっけない。あたしも用事があるんだった。こうしちゃいられない。

急がなくちゃ」

三太「何？ その言い方」

裕子「変だった？」

三太「変だよ。なあ環？」

心ここにあらず状態の環。

環「えっ？ ああそう、そうかもね」

三太「(不思議そうに)どうしたの？ さっきからみんな様子がおかしいけど」

3人は髪を振り乱し、いっせいに首を横にブンブン振り始める。

三太「…怖いって」

ゆかり「(髪を乱したままキツパリと)とにかく！ あたしたちは帰りますから！ 今すぐ帰りますから！ 文句あります？」

三太「(勢いに押され)イヤ…別に文句はないけど」

ゆかり「環、あたしたち帰るけど、しっかりやんなさいよ」

三太「やるって何を？」

環「(大慌てで)何でもない何でもない！（ゆかりたちに)もういいからさっさと帰って」

ゆかり「(ニヤツと笑い)それでは、今日はこれで失礼しまあす。環、明日にでも電話するからね」

裕子「環さん、がんばってね」

環「分かったから！」

裕子「お兄さん、また」

三太「…ああ、お袋によろしく」

ゆかり・裕子「失礼しまあす！」

玄関への入り口から出て行く2人。

大きなため息を吐き出し、どっとソファに座り込む環。

三太「あの2人どうしたんだ？」

環「(焦って)どうしたって？」

三太「様子変だっただろ」

環「そっそっそう？ そんな事ないんじゃない？」

三太「お前もすごく変だけど」

環「(大慌てで)あたし？！ あたしのどこが変？ どのあたりが？！」

三太「眉間にシワ寄りまくってるよ」

環、眉間のシワを必死に伸ばす。

三太「本当におかしいぞ。何かあったのか？」

環「別に何も」

三太「じゃあ、しっかりやんなさいとかがんばってとか言われてたのは何？」

環「えっとお…」

三太「何かやるの？」

やるという言葉に過剰反応する環。

環「やるう？！」

環の過剰反応に戸惑う三太。

三太「…うん。何だったら俺、手伝おうか？」

環「手伝うう？！」

三太「お前突然素っ頓狂な声出すなよ！」

環「だってお兄ちゃんが、急に手伝うなんて言い出すから！」

三太「何だよそれ。俺じゃ手伝えないような事？」

環「(首を横に振る)そんな事ない。全然そんな事ない。むしろ手伝ってもらわないとできないって言うか…」

三太「何するの？」

三太を責める環。

環「そんな！あたしの口から言わせる気？！」

三太「(環の勢いに怯んで)言ってくれなきゃ、何手伝ったらいいのか分かんないじゃん」

環「ああそうか…。そう…そうね。そりゃそうだわ」

肩でせいせい息をして、胸を押さえる環。

環「心臓痛い…」

三太「お前メチャクチャ変だぞ。心底変だぞ。具合でも悪いのか？」

環「違うの。大丈夫。これは精神的なものだから」

三太「精神的？」

うなずいて、ジッと三太を見つめる環。その視線に怯む三太。

三太「何だよ、その目」

環、大きく息を吐き出し、姿勢を正す。

環「お兄ちゃん」

環につられて姿勢を正す三太。

三太「何」

環「お兄ちゃんに、大事な質問があります」

三太「何、何ですか？ 藪から棒に」

環「もんのすごく言い難いんですけど」

三太「はあ」

環「(ゴクンと唾を飲み込んで)お兄ちゃんはホ…」

三太「ホ？」

環「(咳払いをひとつ)お兄ちゃんはホ…ホ…」

三太「ホ～タル来い？」

環「違います！ 違ううえにつまんない」

三太「つまんない言うな。じゃあ何だよ」

環「…つまり、お兄ちゃんはあたしと…」

三太「あたしと？」

もう一度つばを飲み込み立ち上がる環。そんな環をジッと見つめる三太。目をつぶり、三太を見ずに大声で叫ぶ環。

環「あたしと…あたしとセックスしたくないんですか?！」

驚きのあまり固まる三太。そっと目を開け、三太を見る環。2人の目が合った途端、我に帰る三太。

三太「え~!!!」

環「え~って何! したくないの? やっぱ女とはできない? お兄ちゃんってホモ?」

三太「はあ?! 何それ! 何で俺がホモ?」

環「だってだって、結婚して5ヶ月も手を出さないのは、お兄ちゃんがホモだからに違いないってゆかりが」

三太「勘弁してくれよお」

環「確信ありげに言ってたよ」

三太「大ぼら吹きやがってあの女」

環「じゃあ違うのね? ホモじゃないのね?」

三太「違うよ。何で俺がホモなんだよ」

環「お兄ちゃんからはホモ臭がするってゆかりが」

三太「ホモ臭? 止めてくれよ。だいたいさ、何でお前、そんな事信じるわけ?」

環「別に信じてないよ。信じてはなかったけど、でも…」

三太「何だよ」

環「…だって」

三太「だって何?」

環「…5ヶ月何もしないのは本当じゃん」

三太「…それは、だな…」

環「何?」

三太「…いや…別に…」

しばらく2人の間に気まずい沈黙が流れる。

三太「環」

環「ん?」

三太「…なんで?」

環「えっ?」

三太「イヤ…なんで急にそんな事言い出したのかなあって思ってさ…」

環「それは…」

三太「何」

環「…あたし…」

三太「ん?」

環「あたし、来週35になるでしょ?」

三太「…ああ」

環「…今の状態のままで…誕生日迎えるのヤダなあって、思って…」

三太「…うん」

環「それに…」

三太「どうした？」

環「…子供…ほしいし…」

三太「…そっか」

環「…うん」

再び2人の間に沈黙が訪れる。

三太「…あのさ」

環「ん？」

三太「…しよっか」

環「えっ？」

三太「しよ」

環「…本当に？」

三太「イヤ？」

環「ううん、イヤじゃない。イヤじゃないけど…」

三太「何？」

環「…なんか、緊張してきちゃって…(緊張の末の乾いた笑い)ハハハ」

環の緊張が三太に移る。

三太「ハハハ…確かに…」

無意味に笑い合う2人。

三太「え〜と、あ〜…ほら、こういう事はさ、思い立った時にパパッとやっちゃった方がいいんだよ」

環「そう…だね」

三太「そうそう、そういうもんなんだよ。パパッとね、やっちゃえばいいんだよ」

環「だね」

三太「やっちゃえばさ、あとは何とでもなるもんだから」

環「そうだよね。何とか…なるよね」

ジッと見つめ合う2人。緊張が頂点に達した時、スクッと同時に立ち上がる2人。

環「あたしお風呂入れてくる」

三太「俺、布団敷いてくる」

お互いを見つめ、よし！ とばかりにうなずくと、環は玄関(廊下)への入り口へ、三太は隣室へと同時に入っていこうとする。

と、突然ピンポーンとドアフォンが鳴る。

環「何？」

三太「誰だよ、こんな時に！」

再びドアフォンが鳴る。恐る恐るドアフォンに近づき、そっと持ち上げる環。

環「はい…えっ？」

三太「誰？」

ドアフォンの口を手で蓋をし、三太に答える環。

環「蘭子さん」

三太「蘭子？ 何であいつが？」

環「知らないよ」

三太「何なんだよもう！」

環「どうするの？」

三太「どうするって……」

環「お兄ちゃん！」

三太「切れ」

環「えっ？」

環の持っているドアフォンを指差す三太。

三太「それ置いちゃえ」

ドアフォンを置く環。すると再びドアフォンが数回鳴る。

頭を抱える三太。

三太「ああ」

環「お兄ちゃん、どうする？」

三太「……仕方ない。入れよう」

環「入れるの？」

三太「仕方ないだろう。入れなきゃ後で何言われるか分かんないぞ。あいつは昔っから執念深いんだ」

環「じゃあ、今日は止める？」

三太「ダメだ！ やると決めたら最後までやる！ この勢いのまま行くんだ！」

再びリビングに鳴り響くドアフォン音。

三太「家には入れる。その代わりさっさと帰す。『何としても速やかに退場していただく作戦』で行こう」

環「大丈夫かな」

三太「大丈夫だ。あいつ店があるから、それほど長居はできないと思う」

環「そっか！ そうだね」

またまた鳴り響くドアフォン。

三太「よし！ 出ろ、環」

環「了解」

ドアフォンに突進する環。

環「はい。ごめんごめん。今開ける」

ドアフォンを置く環。

環「じゃあ、入れるよ」

無言でうなづく三太。それを受け、玄関に向かう環。

環(声)「いらっしやい、蘭子さん」

蘭子(声)「遅かったじゃないの」

そう言いながら、リビングへと入ってくる蘭子。ちょっと大きめの鞆と、小さなバッグ、そして紙袋を持っている。

蘭子「なあにい。2人で何かやってたの？」

三太「べっ別に。なあ環」

環「そうそう。何もしてないよ」

蘭子「ふ～ん。まあいいわ。はいこれお土産」

持ってきた紙袋をテーブルに置く蘭子。

三太「お土産？」

蘭子「旅行行ってきたの」

三太「あっそ」

蘭子「あっそって、ずいぶん冷たいじゃないの。どこ行ってきたのとか、誰と行ったのとか、いろいろ聞く事あるんじゃないの？」

三太「別にない」

蘭子「(ため息を吐き)あ～あ…。男って、結婚すると急に冷たくなるのよねえ」

環「(ギョツとして)前は冷たくなかったの？」

三太「(慌てて)お前な、誤解されるような事言うなよ」

蘭子「だって本当の事じゃないの」

ジ～と三太を見つめる環。

三太「(焦って)環、これは一般論だからな。いいな、変な誤解するなよ」

蘭子「(面白がって)いや～ん。何かお取り込み中だった？」

三太「(キツパリ)全っ然！ それよりさ、なんだよ突然。来るなら来るで、電話の一本くらい入れろよ。それが社会の常識だろ」

蘭子「あらあ、ずいぶんなご挨拶ね」

三太「こっちだって都合があるんだからさ」

蘭子「都合って？」

三太「えっ？」

蘭子「都合って何？」

三太「何って…別に」

2人をジ～っと覗き込むようにする蘭子。

蘭子「やっぱりあたし、お邪魔だった？ お取り込み中だったんじゃないの？」

環「(慌てて首を横に振り)そんな事ない！ 全然ないの！ ゆっくりしてってね！」

三太「環？」

蘭子「本当にいいのお？ ゆっくりしちやって」

環「全然大丈夫！」

蘭子「そっ。じゃあお言葉に甘えちゃおうかなあ」

環「どうぞどうぞ」

蘭子「ありがと。ああ、それお菓子よ。とつてもコーヒーと合うの。って事で、環ちゃんコーヒーもらえる？」

環「ああ！ ごめん。気付かなくて。ちょっと待っててねえ」

キッチンに行こうとする環を部屋の隅に連れていき、小声で文句を言う三太。

三太「何だよ！ どうぞどうぞって」

環「だって、全部見透かされてるみたいで怖かったんだもん！」

蘭子、持ってきたお菓子の箱を開け、食べ始める。

三太「だからってさ」

環「お兄ちゃん、本当に蘭子さんと何でもないのね？」

三太「気持ち悪い事言うなよ。あるわけないだろ？」

環「だって、蘭子さんの現れ方タイミングよすぎるよ。お兄ちゃんの事見張ってるんじゃないの？」

三太「知らないよ！」

疑りの目で三太を見つめる環。

環「本当にい？」

三太「当たり前だろ！」

環「…分かった。取りあえず信じる」

三太「何だよ取りあえずって。全面的に信じろよ」

環「だったらお兄ちゃんが責任持って蘭子さん帰してよ。そしたら信じる」

三太「何の責任だよ」

環「いいから！ とにかくあたしコーヒー淹れてくるから、その間にいい考え浮かべておいて」

三太「…分かったよ」

キッチンに入っていく環の背中に声を掛ける蘭子。

蘭子「環ちゃ～ん、コーヒー濃い目でねえ」

環(声)「は～い」

ジ～っと蘭子の目を見つめる三太。

蘭子「何？」

三太「お前さ、うちに盗聴器仕掛けてないよな？」

蘭子「盗聴器？」

三太「そう。何で今この瞬間に現れるのかなあと思ってさ」

蘭子「(ワクワクして)やっぱり何かあったのね？」

三太「別に！ 何もありません」

蘭子「…怪しいわねえ」

三太「そんなことより、お前店どうしたんだよ」

蘭子「店？」

三太「そろそろ開店時間だろ。こんなところで油売ってる場合じゃないんじゃないの？」

蘭子「お店なら、今日まで休みよ」

三太「休み？！」

蘭子「ええ」

三太「マジでえ？！」

蘭子「そりゃそうでしょ。今旅行から帰ってきたばかりだもん。疲れちゃってお店どころじゃないわよ」

がっくり肩を落とす三太。

三太「…ああそう」

蘭子「どうしたの？」

三太「イヤ、別にどうもしないけど」

3つのコーヒーカップを乗せたトレイを持って、キッチンから出てくる環。

環「お待たせしましたあ」

蘭子「ありがと、環ちゃん」

美味しそうにコーヒーを啜り、お菓子をパクつく蘭子。

蘭子「やっぱりこのお菓子、コーヒーに合うわあ」

環「それはよかった。(小声で三太に)どう？」

三太「今日店休みだって」

環「マジで？」

三太「ああ」

コソコソと話をする2人に気付く蘭子。

蘭子「何してるの？」

三太「何もしてません」

何かを思い付き、突然話し始める環。

環「そうそう！ 蘭子さん」

蘭子「何？」

環「最近、空き巣被害が多いんだって」

蘭子「何の話？」

環「ほら、旅行で長期家を空けてると、狙われやすいっていうじゃない？ ねえお兄ちゃん？」

環の話の意図を感じ、必死に合わせる三太。

三太「そうだな！ それはよく聞くな！」

環「昨日もテレビで特集やってたよ。鍵なんて、無理矢理こじ開けて侵入してくるんだって」

三太「それは心配だなあ。お前確かネコ飼ってたよな」

環「え～そうなのお。ネコちゃんに何かあったら大変じゃな～い」

三太「そうだよな。一刻も早く帰った方がいいな」

環「うん！ その方がいいね」

蘭子「(あっけらかんと)うちは大丈夫よ」

三太「ダメダメ。うちだけは大丈夫っていう油断が災難の元なんだよ」

環「そうそう！ うちの子だけは大丈夫って言う親の子に限って、み～んな非行に走っちゃうんだって」

三太「み～んなか？！」

環「そう！ み～んな！」

三太「それはいけないなあ。親の躰が行き届いてないって事だもんな」

環「躰って大事だよな」

三太「大事大事。今の時代、子供には何よりも躰が一番大事だよな」

環「うんうん。やっぱり学校教育より家庭の教育第一だね」

三太「そうだな。俺もそう思うな！」

蘭子「(いぶかしんで)何の話？」

三太「何って」

蘭子「あんたたち、子供できる前から躰の話なんてしてるの？」

三太「えっ？」

蘭子「もしかして！ もう気配があるとか？」

環「気配？」

蘭子「吐き気がするとか、来るものが来ないとか、突然酸っぱいものが食べたくなったりいろいろあるでしょ？」

環「そういう事は…あんまりないかなあ…」

蘭子「またまたあ。本当はあるんでしょ？ だから躰の話なんかしてるんじゃない？ 誰にも言わないから、隠さなくてもいいじゃないのお」

環「隠すとかじゃなくって…」

SOSを三太に送る環。

蘭子「本当にないの？」

ぶんぶんと首を縦に振る環。

蘭子「そう…。そうだわ！ いい機会だから1度ちゃんとお医者さんに診てもらった方がいいわよ。母体の健康は子供の健康でもあるんだから。小学校の同級生に産婦人科の医者になったのがいるの。三太も覚えてるでしょ？ ビン底メガネの吉村」

いたたまれず、いつの間にか玄関へと向かっている三太。

蘭子「どこ行くのよ」

環「ちょっとお兄ちゃん？」

三太「…タバコ買ってくる」

環「えっ？ 何で？」

玄関へと消える三太。

環「ちょっとお兄ちゃんったら！」

三太を追いかけて、玄関に消える環。

環(声)「お兄ちゃん！」

バタンというドアが閉じる音。

蘭子「お兄ちゃんねえ…」

蘭子のバッグの中から、携帯電話の着信音が聞こえる。電話に出る蘭子。

蘭子「もしもし。あらモモ子ちゃん。…ええ…ええそうよ」

ブツブツ言いながら戻ってくる環。

環「全くもう。肝心な時にはいつも」

蘭子が電話中である事に気付く、ブツブツ言うのを止める環。

蘭子「…そう、分かったわ。…はいはい、あとでねえ」

電話を切って、テーブルの上に置く蘭子。蘭子を見て、ごまかし笑いをする環。

蘭子「三太、まだタバコ止めてないの？」

環「そうなの」

蘭子「子供できる前に止めさせなきゃね」

環「…そうだね」

蘭子「ずいぶん前に1度禁煙した事あったのに、結局続かなかったのね」

環「蘭子さんも知ってるんだ」

蘭子「そりゃそうよ。俺がタバコ吸いそうになったら、どんな手段を使ってでもいいから止めろよって言うたのよ」

環「あたしのところにも着た。禁煙するから、当時集めてたジッポコレクション預かってほしいって」

蘭子「そう」

環「あたしね、お兄ちゃんの就職が決まった時、ジッポあげたんだよね」

蘭子「ええ」

環「お兄ちゃんがずっとずっとほしいって言った、レアモノジッポ」

蘭子「茶色の皮が張ってあるヤツ？」

環「そう！ 蘭子さん見たの？」

蘭子「三太に散々自慢されたもの」

環「(ちょっと不満そう)ふ～ん…」

蘭子「何？」

環「お兄ちゃん、あのジッポ無くしたの」

蘭子「無くした？」

環「そう！ 絶対絶対大切にするって大喜びだったのに、あたしに預けたコレクションの中に、そのジッポ入ってなかったの」

蘭子「ふ～ん…」

環「あたしがあげたヤツは？ って聞いても要領得ない事ばかり言うから、頭に着てもういいって追い返しちゃった」

クスッと笑う蘭子。

環「全く情けないったらありゃしない。散々探し回って、バイト代つぎ込んでプレゼントしてあげたのに」

蘭子「そりゃあ、災難だったわね」

環「あ～あ！ こんな事ならもっと安いのにすればよかった」

蘭子、微笑みながらコーヒーを啜る。

蘭子「来月の三太の誕生日にやっす～いジッポあげたらいいんじゃない？」

環「ジッポはもういい」

蘭子「(クスッと笑い)じゃあ何あげるの？」

環「いっぱいご馳走作ってあげるって言ったの。そしたらね、特別の日くらい美味しいもの食いたいからいいだつて。失礼しちゃうよねえ」

蘭子「全くね。しかしクリスマスイブに生まれた子に、三太って名前付けるセンスって、どうなのよって感じね」

環「(噴出して)本当だよね。学校とかでいじめられなかったの？」

蘭子「あいつガキ大将だったから、それは大丈夫だったわよ」

環「そっか」

昔を懐かしむように話し始める蘭子。

蘭子「でも、小学校3年の父兄参観のとき、みんなにからかわれた事はあったわね」

環「父兄参観？」

蘭子「ほら、三太の両親、5歳のときに離婚してるじゃない？ 周りはみんなお父さんが来てるのに、三太だけはお母さんだったから」

環「…そう」

蘭子「でもね、三太はてんでへっちゃらで、『俺だけ目立って格好いいだろう』なんて言ったわ」

環「(フツと笑って)お兄ちゃんらしいね」

蘭子「本当ね。…その日の放課後、私宿題のドリル忘れて学校へ戻ったの。…そしたらね、もう夕方だっていうのに、教室に三太がいたの」

環「なにしてたの？」

蘭子「…黒板に、絵を描いてたのよ」

環「絵？」

蘭子「(うなずいて)…お父さんの絵。黒板目一杯使って、すんごくおっきいの」

環「…」

蘭子「『それ誰？』って聞くと、『いつも手紙くれる人』って言うの。もう一回『誰？』って言うと、しばらくして、『お父さん』って」

環「そう…」

蘭子「…環ちゃん」

環「ん？」

蘭子「…三太の空気抜いてやって」

環「空気？」

蘭子「三太ね、強がり目一杯風船膨らんでるから、針で穴開けてやって」

環「蘭子さん…？」

蘭子「私には、あいつ一生やめないわ、強がるの。でも環ちゃんだったら…ね」

環「でも…」

蘭子「大丈夫。環ちゃんは奥さんだもの」

環「…奥さんか…」

仕方がないわねえとばかりに、環を優しく見つめる蘭子。

蘭子「…ねえ、いい事教えてあげましょうか」

環「えっ？」

蘭子「環ちゃんが中学生の頃、UFOキャッチャーのぬいぐるみ集めてなかった？」

環「(戸惑いながら)集めてたけど？」

蘭子「三太、環ちゃんに一杯ぬいぐるみあげたでしょう」

環「…うん。30個くらいかな。お兄ちゃんUFOキャッチャー上手いんだよね。出かけるついでによく取ってきてくれたよ」

蘭子「(ニヤッと笑って)三太ね、本当はUFOキャッチャーすごく下手なの」

環「え？」

蘭子「もうね、とんでもなく下手なの」

環「…嘘だあ」

蘭子「本当よ」

環「…じゃあじゃあ、あの一杯のぬいぐるみは？ レアモノのジャイアンは？ いったい誰が取ったの？ まさか蘭子さん？」

蘭子「違うわよ。もちろん三太が取ったのよ」

環「…どういう事？」

蘭子「三太がジャイアンひとつ取るのに、いったいいくら使ったと思う？」

環「…いくらって」

蘭子「だいたい3万以上はつぎ込んでるわね」

環「嘘！」

蘭子「あの当時のバイト代、ほとんどUFOキャッチャーに使ってたのよ」

環「マジで？」

蘭子「(笑って)三太には私が言ったなんて内緒よ。もし知られたら私三太に殺されちゃうわ」

環「(戸惑って)でも…何で？」

蘭子「何でって？」

環「だってお兄ちゃん、俺UFOキャッチャーメチャメチャ得意なんだって言ってたんだよ。ジャイアンくれた時だって、『300円で取れちゃったよ。俺って天才だな』って自慢してたんだよ」

蘭子「桁が2つ違うわね」

環「どうしてそんな嘘を？」

環をジッと見つめる蘭子。

蘭子「そうねえ…バカだからじゃないの？」

環「えっ？」

蘭子「バカで見栄っ張りなのよ。大変なら大変って弱音吐けばいいし、言いたいことがあるならちゃんと伝えればいいのに、見栄があって言えないのよ。まあ、男なんてみんなそうだけどね」

環「…そう」

蘭子「(ニヤッと笑って)ただ、そこが男の可愛いところでもあるから困っちゃうのよねえ」

蘭子の笑いを受けて、環もちょっと笑う。

環「そうだね。困っちゃう、ね」

蘭子の携帯電話が鳴る。

蘭子「はい。ええ、ああそう。ここ？ ちょっと待ってね。環ちゃん、この部屋何号室？」

環「(戸惑いながら)305だけど」

蘭子再び携帯の相手に向かって話し始める。

蘭子「305だって。そう…分かったわ。今行く」

携帯を切る蘭子。

蘭子「ちょっと行ってくるわね」

環「行ってくるって…」

戸惑う環を尻目に、玄関へと向かう蘭子。

玄関を開けるガチャツという音。

蘭子(声)「ずいぶん早かったわねえ」

モモ子(声)「ここが三ちゃんちなのねえ」

バラ子(声)「お邪魔しまあす！」

モモ子(28)、バラ子(33)、蘭子の順でリビングに戻ってくるのを見て、驚く環。

モモ子「環ちゃん久しぶり〜」

環「モモ子ちゃん?! 何でここに?」

環を上から下までジロジロと、ライバル心剥き出しで見つめるバラ子。

バラ子「あなたが三ちゃんの奥さんの環さん?」

環「…そうですけど」

蘭子「環ちゃんはじめてよね。半年ほど前に入ったバラ子ちゃんよ」

バラ子「バラ子です。どうぞよろしく」

環「はあ…」

バラ子「三ちゃんは?」

リビングをキョロキョロ見回すバラ子。

モモ子「バラ子ちゃん、どうしても三ちゃんの奥さんが見たいって言うから、連れてきちゃった」

環「あたし?」

隣の部屋とかキッチンを覗くバラ子。

バラ子「ねえ、三ちゃんは?」

蘭子「今タバコ買いに行ってるわよ」

バラ子「ふ〜ん…。つままないの」

ドサッと椅子に座るバラ子。

蘭子「バラ子ちゃんったら三太のファンなのよ」

環「ファン?」

モモ子「はじめて会った時から、好みだ好みだってうるさいのよ」

環(蘭子に)「…もしかしてお兄ちゃん、蘭子さんたちの世界じゃモテキャラ?」

バラ子「当然三ちゃんは、あたしたちの世界じゃスゴモテキャラよ」

環「スゴモテ?!」

モモ子「ヤアダア! もしかして環ちゃんたら妬いてるのお?」

環「違うわよお!」

モモ子「あ〜赤くなってるう」

環「なってません!」

蘭子(呆れて)「あのねえ環ちゃん。バラ子ちゃんの言う世界っていうのは、デブ専の事よ」

モモ子「一緒にしてもらいたくないわあ。あたしはジャニーズ好きなんだから」

環「ああ…そう…」

玄関のドアが開いて閉じる音。

三太(声)「ただいまあ」

リビングに入ってくると、バラ子とモモ子の存在に驚き、啞然とする三太。

三太「…増えてるし」

三太に抱きつくバラ子。

バラ子「三ちゃんお帰り！ バラ子寂しかったあ」

バラ子を必死で引き離す三太。

三太「何だよこれ。何で増殖してんだよ」

モモ子「増殖って何よ。あたしたちはゾウリムシじゃありません」

三太「環、ちょっと」

環を部屋の隅まで引っ張っていく三太。

三太「何で増えてるんだよ」

環「知らないわよ。勝手に入ってきたんだもん」

三太「止めろよ」

環「そんな暇なかったの。…お兄ちゃんこそ何やってたのよ。ずいぶん遅かったじゃないの」

三太「近くの自販機、売れ切れてたの」

疑いの眼差しで三太を見る環。

三太「何だよその目」

環「本当はお兄ちゃんが呼んだんじゃないの？」

三太「はあ?!」

環「蘭子さんもそうだけど、どうして今日に限ってこんなに次から次に人が来るのよ。おかしいじゃないの」

三太「そんなの知らないよ」

環「怪しい。バラ子さんって人、お兄ちゃんのファンなんだってね。よかったわねえ、モテモテで」

三太「あのなあ」

モモ子「環ちゃ〜ん」

環、超不機嫌に振り返る。

環「何？」

環の不機嫌さにひるむモモ子。

モモ子「イヤあのお…取り込んでるならあとでいいわ」

環「全然取り込んでません！ 何？」

モモ子「…コーヒーもらいたいなあと思って」

環「コーヒーね。分かった！」

三太「ちょっとおい！」

三太の制止を振り切り、ずんずんキッチンに入っていく環。

三太「何なんだよ全く」

バラ子「三ちゃん」

三太「何だよ」

バラ子「うちの中、探索していい？」

三太「ああもう勝手にしろよ」

モモ子「私もお。新婚家庭って興味あるわあ」

モモ子とバラ子、連れ立って隣の部屋へ入っていく。

蘭子「ねえ三太。ちょっと聞きたい事あるんだけど」

三太「何だよ」

蘭子「三太さあ、環ちゃんからもらったジッポ、無くしてないわよね」

三太「えっ？…ああ」

蘭子「やっぱりそうよねえ。何でか知らないけど、環ちゃんは無くしたって思い込んでるわよ」

三太「…ああ」

蘭子「何でそんな事になってるの？ 確か郵便局に置いてあるんでしょ？」

三太「イヤ…それが…」

蘭子「違うの？」

三太「持って帰ってきたんだ」

蘭子「あら、だったら早く環ちゃんに見せてあげなさいよ。無くしたって怒ってたわよ」

三太「怒ってた？」

蘭子「ちょっとね」

はあ…と大きくため息を吐く三太。

三太「参ったなあ…」

蘭子「どうしたのよ」

三太「無いんだよ」

蘭子「は？」

三太「行方不明なんだよ、ジッポ」

蘭子「どういう事？」

三太「これくらいの箱に入れておいたんだけど、環が机の上整理しちゃって、どこにあるのかまるっきり分かんないんだよ」

蘭子「ああ…」

三太「おまけに俺、免許証もなくしたみたいなんだよ」

蘭子「免許証？」

三太「先週ビデオ屋の会員になった時は確かにあったんだけどなあ…」

蘭子「ビデオ屋には連絡したの？」

うなづく三太。

三太「ないって」

蘭子「じゃあ落としたのね。ちゃんと紛失届け出したの？」

首を横に振る三太。

蘭子「なにやってんのよ。さっさとしなさいよ」

三太「ああ！」

突然髪をぐちゃぐちゃにかきむしる三太。それに驚く蘭子。

蘭子「なに?! どうしたのよいったい」

三太「来週あいつの誕生日なんだよ」

蘭子「知ってるわよ。それがどうしたの？」

三太「実はさ、あいつが一度でいいから行ってみたいって言ってたレストラン、内緒で予約したんだよ」

蘭子「あらいいじゃない」

三太「全然よくないんだよ」

蘭子「なんでよ」

ガックリと肩を落とす三太。

三太「そこ、車じゃなきゃ行けない場所にあるんだよ」

呆れる蘭子。

蘭子「(ため息ひとつ)あんたっていつもいつも、最後のツメが甘い男よねえ……」

ドアフォンが鳴る。がっくりと肩を落としたまま三太が出る。

三太「はい。…ああ、久保田さん。はい、ちょっとお待ちください」

ドアフォンを置く三太。

三太「環～！」

環(声)「(不機嫌なまま)何よ」

三太「隣の久保田さん」

環(声)「幸子さん？」

突然ドタドタと慌てた様子でキッチンから出てきて、そのまま玄関に向かう環。隣の部屋からモモ子とバラ子が出てくる。

モモ子「お客さん？」

玄関のドアを開けるガチャツという音。

幸子(声)「環ちゃん！ とうとう手に入ったで！」

環(声)「嘘っ！」

手に紙袋を握り締め、ずんずんとリビングに入ってくる久保田幸子(42)。

あでやかな顔立ちなのだが、少々太り気味。

幸子「あら、お客さんやったの？ どうもお。隣に住んでます久保田ですう」

蘭子「(愛想良く)こんばんは。宮本君の幼なじみで蘭子と言います。新宿2丁目で『秘密の花園』っていうバーをやってます」

モモ子「『秘密の花園』のモモ子でえす」

バラ子「バラ子でえす」

幸子「こんばんはあ」

環「幸子さん、見せて見せて」

幸子「(興奮して)もう絶対に無理やって思ってたのに、今日送られてきてたんよお！」

大事そうに、紙袋からDVDを取り出す幸子。

幸子「限定10万枚、カン様のお宝DVDやで」

環「すご～い！」

蘭子「カン様？」

幸子「あんた知らんの？ カン様言ったらカン・ドンウオンやんか」
バラ子「カン・ドンウオン?!」
モモ子「うっそお！」
幸子「あんたらも好きなん？」
モモ子「好き好き、大好きい！」
蘭子「誰なの？」
モモ子「ママ知らないの？ 若手の韓流スターじゃ、今一番人気の俳優さんなのよ」
バラ子「モデル出身で背が186センチもあって、プロポーションよくて目がものすごくセクシーなの！」
幸子「(バラ子に)あんたええ事言うなあ。ホンマにセクシーやわあ。もうあの目で見つめられたら昇天もんやわな」
モモ子「分かるう！ 分かるわあ!!!」
バラ子「これが噂のお宝DVDなのね」
幸子「そうや。手に入れるの本当に大変やったんよ」
モモ子「観た〜い！」
バラ子「あたしもお！」
幸子「カン様ファンなら誰でも歓迎するわ」
モモ子「やった！」
幸子「環ちゃん、早速うちに来るやろ？」
環「行く行く！」
三太「環！」
環「あ…」
幸子「どないしたん？」
環「…今日はまずい…かな？」
幸子「なんか用でもあるん？」
三太「(焦って)あるんですよ。ものすごく大事な用があるんです。なあ環？」
環「ある…確かにあった」
幸子「カン様より大事な用なんて、この世にあるの？」
環「…ちょっとだけ大事」
三太「ちょっとかよ」
幸子「(ものすごく残念そうに)そうかあ…。ほなしやあないなあ」
モモ子・バラ子「あたしたちは行きます〜す」
蘭子の携帯が鳴る。
蘭子「もしもし…」
幸子、リビングを出て行きながら
幸子「(モモ子とバラ子)ほな、行きますか？」
モモ子・バラ子「は〜い！」
幸子「環ちゃん、今度一緒に観よな」

環「楽しみにしてます」

幸子「(三太に)ほしたら、失礼しまあす」

リビングを出て行く幸子と環。

モモ子「ママ、明日ね」

電話をしつつ、手を振る蘭子。

バラ子「じゃあね、三ちゃん！」

リビングを出て行くモモ子とバラ子。

携帯を切ってテーブルの上に置き、バタバタと帰り支度をする蘭子。

蘭子「あたしも行くわ」

三太「本当に？」

蘭子「ペットショップから、早くネコ受取に来てほしいって連絡きちゃった」

三太「そっか！」

蘭子「でも…せっかくコーヒー淹れてもらったのよねえ」

三太「そんなの全っ然気にしないでいいから」

リビングに戻ってくる環を見つめる蘭子。

蘭子「やっぱりコーヒー一杯飲んでから帰えるわ。三太持ってきてよ」

三太「何で俺が？」

環「あたし持ってくるよ」

蘭子「ああ環ちゃんはいいの。三太持ってきて」

三太「…ったくもう！ その代わり飲んだらさっさと帰れよ」

蘭子「分かってるわよ」

仕方なさそうにキッチンへと入っていく三太。

蘭子「…環ちゃん」

環「何？」

蘭子「あたし思うんだけど、環ちゃんがあげたジッポ、三太は無くしてないと思うわよ」

環「えっ？」

蘭子「大切なものって、普段はなかなか気付かないけど、とても近くにあるものでしょ？」

環「(戸惑いながら)蘭子さん？」

蘭子、自分の荷物を持つ。

蘭子「じゃあね」

環「えっ？ あの、コーヒーは？」

蘭子「いらないわ。三太と2人で飲んで。それじゃ」

リビングを出て行く蘭子。コーヒーカップを持って出てくる三太。

三太「これ飲んだらさっさと」

蘭子がいないうちに気付く三太。玄関のドアが閉まるガチャンという音。

三太「蘭子は？」

環「帰った」

三太「帰った?! わざわざ人にコーヒー淹れさせて、挨拶もなしに帰った？」

環「…うん」

三太「全くあいつは何考えてんだよ。帰るなら帰るでひと言」

やっとなんかみんなが帰り、2人っきりになった事に気付く三太。

三太「あ〜と…みんな帰ったんだな…」

環「ああ…そうだね。2人っきり、だね…」

お互いの顔を見合わせ、照れ笑いの2人。

三太・環「アハハハ…」

またまた緊張が高まる2人。最高潮に高まった時、同時に口を開く。

三太「俺、お風呂入れてくる」

環「あたし、布団敷いてくる」

環は玄関(廊下)への入り口へ、三太は隣室へと同時に入っていこうとする。

と突然、テーブルの上に置いてあった蘭子の携帯電話が鳴る。

環「えっ？」

三太「忘れていきやがった！」

携帯の着信音が徐々に大きくなっていき、携帯に明かりが当たると同時に全体の照明が
C・O。

携帯に当たっていた明かりもF・O。

携帯の着信音がF・Oしていくのとクロスして、にぎやかな音楽がF・I。

続きはあらすじ (ホームページ内 <http://www.supercomplex.net>) をご覧下さい。